

死線で母の顔

福島県 伊藤 光夫

私は昭和十六年三月二十日現役兵として、広島の高射砲第十六連隊へ入隊しました。軍隊はすべて規則・規律で朝から夜寝るまで嗜しに勝る軍務で度肝を抜かれました。

三日後の二十三日、事変地へ派遣されるため、宇品港より出航しました。行先は中支とのことでした。約一週間ほど荒波に揉まれ、大部分の者が船酔に苦しみ、初めて会った者同志ですが、そのような苦しい時にお互いに助け合うことで戦友として仲良くなりました。

南京に上陸し第一中隊に編入されまして、初年兵の集合教育です。一期の検閲が終わるまでは一寸の休みもなく毎日がきつい訓練だった。また外地ですから営外教育訓練の時は、絶えず神経を周囲に働かせて、一寸の油断も許されず緊張の連続でした。

その頃中隊長に呼ばれて

「君は幹部候補生の試験を受ける」

といわれました。それから後は一般戦友と同じように勤務、訓練を行ない、夜間消灯後將校室や下士官室にて深夜まで勉強しました。

昼間の疲れでついウトウトと居眠りをしていると

「貴様それで幹部になれるか」

と怒鳴られました。訓練、即実戦という外地での受験勉強は大変苦しいものでした。精神より肉体の方が先に弱りました。

試験も無事おわり。七月一日陸軍兵科甲種幹部候補生を命ぜられました。でも隊内においては前日と変わりなく、いやそれ以上に内務や訓練にきびしく、とくに古年兵に苦しめられた。十月一日内地の学校に入学といわれて南京を出発し、ヤレヤレと思いながら十九日千葉県稲毛陸軍防空学校に入りました。学校教育は幹部養成ですから、なかなか厳格でした。十七年四月一日付で見習士官になり、原隊復帰命令が出ました。南京総軍作令により兵庫県神戸の防空地区隊付を命

ぜられ関西全地域の防空について火器及び諸施設、もちろん軍需工場から市街地に至るまで、調査時には民間人も含めての教育も行いました。

十二月一日付けで高射砲第三連隊（兵庫県加古川）付となり砲兵科教育に専念しました。十八年二月八日船舶砲兵第一連隊（広島）付で砲部隊に行きました。砲部隊は日本基地（港）から海外基地（港）に兵員や諸物資等の輸送および基地周辺ならびに海上警備等が最重要任務です。軍艦でなく輸送船、時には上陸用舟艇に乗務します。

五月八日、輸送船に乗務し宇品港を出航しました。装備は船首に高射砲、船尾に高角砲各一門、その他機関砲や時には野砲、迫撃砲も使用しました。行先は台湾の基隆、高雄、マニラ、佛印、マレープライ島、ラングーン、シンガポール等々で主に物資輸送が第一目的でした。敵主力部隊が現われても強行輸送をやりました。

プライとラングーンの輸送時に米軍のB24爆撃機に攻撃され五十キロ爆弾が数発被弾し、戦闘要員の半数

を失いました。

十一月二十日、宇品に帰港しまして第三号艇に乗務しました（私は陸軍ですが、まるで海軍士官のごとく舟ばかり乗りました）。もちろん船上甲板の砲術士官です。三号艇は上陸用舟艇で（SS）といい一トンぐらいでした。先ず瀬戸内海で試験航行を行い、対空対潜の訓練を充分やりました。十九年一月四日ハルマヘラ島へ向かって出航、高雄、マニラ等に寄港しながら一月十六日着港し、これより三ヶ月余りワスレー、マヌクワリ、カメリー、モミカン、等で船舶輸送警戒および泊地等の警備の任につきました。

三月二十八日マヌクワリ司令部にSS艇で帰港すべく、港の入り口にさしかかり、ヤレヤレ帰ったと少し気をゆるめた、その途端

「右舷前方0時の方向魚雷航跡発見」

と見張りの監視兵の声にびっくりしました。敵潜水艦の攻撃です。第一弾は舵を取ってかわしました。つづいて第二弾、第三弾とききました。その一発が中央機関部を直撃し、ボンと投げ飛ばされ艇はアツという間に

轟沈です。艇長は歴戦の優秀な佐官でした。常日頃から「乗組員全員が一身同体である。たえず艇と運命を共にする覚悟でいろ。一名の欠員もなく全員で艇を護るのだ、それが身を護りまたお国のためなのだ」と教育しておられました。

私は砲術長として甲板上にて指揮を取っていました。が、全員退艦の声もなく全員舟と一緒に水面下に吸い込まれました。

救命胴衣は常時着用です、私は戦時名簿等「秘」の重要書類を携行していました。渦巻に飲み込まれ、目の前が真っ暗くなり、頭の中が真っ白くボウーとなりました。その瞬間でした、母親の顔が現われ「光夫、元氣を出せ」と同時に、身体が軽く急の上の方へ登って行き、あたかもロケット発射の如く海面上に一・二メートルも飛び上がりました。中には水く屍となった戦友もいました。港より救命艇が急行してきてくれ助かりましたが、多くの犠牲者を出し英霊が出たことは誠に残念でした。

後日談ですが、母が昭和十八年三月二十八日午後三

時と記帳した紙を佛間の壁に貼り付けて「この時光夫になにかあった」と家内中に話したそうです。これが親子の絆と言うことでしょうか。私とても四カ年半の軍隊生活の中で一番胸に残る体験でした。

便船にて広島に帰隊し、昭和十九年になって、SB一〇三号艇に乗務しました。この艇は米軍のSL艇に勝るとも劣らぬ派手な船でした。

SSより改良され少し大きくなって、最高速力も十六ノットで、輸送力も歩兵二百名、戦車四両、自動車数台と高かった。装備も艦首に高射砲一門、艦尾に高角砲一門その他三連装機関砲二門、二連装二門、単装一門で、全火器同時発射すると六十秒で三千発の弾丸が飛びだします。また敵前上陸時には全火器の水平発射と同時に海岸線に突入し、船首部分が開口してそれが前方に倒れて棧橋の役目をするようにできています。

比島作戦に出動しました。途中で機関部に故障ができて台湾に立ち寄り、支那大陸ぞいに走り、朝鮮に寄港して宇品に帰りドック入りしました。

その後は外の舟に乗務して内地と朝鮮間の物資輸送に従事しました。臨時第三機関砲隊が編成されまして、中隊長として博多湾の防衛の任につき、その後、同隊任務終了で解隊し、全員原隊復帰となり、私は宇品基地勤務となり広島に下宿していました。あの原子爆弾地点の三キロほどのところでした。私はその一週間後に何度も爆心地付近まで行きましたが原爆症にならなかった。

八月十五日正午、天皇陛下の玉音放送で終戦となり、残務整理後、故郷会津磐梯山麓のわが家の門をくぐった。

私はSS甲板長として乗務中、部下百名中三十五名の死傷者を出し、またSBでは百六十名中六十名の死傷者を出しました。合せて九十余名の逝去者を出しましたことをお詫びし、二度と戦争のないようにお願い致しますと共に、多くの御英霊に対し心よりご冥福をお祈り申し上げます。

南洋マリアナ孤島 パガン島の戦

茨城県 畑岡 清

「パガン島という島はどんな島ですか。また、畑岡さんは何処の部隊に何時頃入隊しましたか。」

パガン島というのは、南洋のマリアナ諸島の北端近くで、サイパン島の北方約二百九十キロで、長さ十二キロ、幅約四キロの火山島です。

私は大正十一年十一月生れで、現役兵として昭和十八年二月一日に仙台の東部第二十二部隊に現役で入営です。仙台には一ヵ月いて、三月に満州間島省琿春県の春化の歩兵第八十九連隊第十一中隊に入隊したのです。

ですから初年兵の時は国境警備でした。一個小隊ごととに山地で警備というか敵状監視です。山の下が河で、対岸はソ連領です。教育は歩兵第八十七連隊（原）ですが、満州第八五三部隊の名称になったのです。一期